



Sino

久米又三

## 持ち前

○

この秋、長男が結婚して別に居を構えたので、家はその二人にかえて、いたって静かな生活がつづいていく。人生の最終経験というにはほど違いのであろうが、味いは独得である。先日の披露の席で、お出で願ったかたがたから、いろいろとお話を伺わせていただいて、た

いへんありがたく感じたが、いろいろなお話がいまだに心の中でゆききして、それが生活のあいまあいまに浮かんでくる。その中でも、とりわけ当人が、かつて幼稚園にかよったときに、なにくれとお世話いただいた先生からの話は、親である私どもにすら「人の世は幸せなもの」との感じを深めさせていただいた。何がそんなに幸せなのであろうかと、その後もときどき考えることがある。「友あり」というと失礼ではあるが、なにか「遠方より来る」といった感じと、どこかに似たところがあるように思える。

当人が幼稚園にかよったのは、故えてみると二十数年も前のことである。二十数年というと、人生行路のなか

で、短かい年月とはいいい難い。この間に、世も移り変わるであろうし、また、人の心にも移り変りがあるであろうと思われる、それにもかかわらずそのような考えとは反対に、私どもが先生のお話を伺っている間に、はたと驚ろいたことには、先生が当時、幼なかつた当人について感じとられたそのままが、現に成人して披露の宴に立っている当人について私どもに感じているということであつた。

人には、二十数年を経ても動じないものがあるというのが普通なのであるか。それとも徐々に変容するのが一般なのであるか。あるいは、時には生まれ変わったように変貌することも可能なのであるか。どこかで、どこかの学問がそのようなことについて定説を出しているのであるか。それ以来、私にとって心の中に残っている問題である。どうも、人の中にはびくともしない何もかがひそんでいるというのが、私の感じである。

生物は微妙なものであつて、たくみに環境の変化に適應しているというのが一般の考えのようである。われわれが、生物に心ひかれるというのも、実はこのようなことのためと思われる。そのような考えが不当だなどとは思わないが、それだからといって、生物は、瞬間瞬間の変化に対して、当意即妙に適應してゆくほどの器用さがあるかどうかということになると、いささか問題は残つている。自然が生物に与えた器用さには限度があつて、生物はそのわくの範囲内で、最善をつくしているというのが適切なようである。

公式的な例をあげると限りがないが、生物のからだの成長や進化を支配している法則の一つに、対比成長の法則というのがある。この法則は簡単な函数式で表現できるもので、からだや器官の大きさを、年月を追つて計測して、式にあてはめることができるような指数を割りだしておく、からだや器官の大きさが、何年目にはどのくらいになるか推測ができるわけである。生物のからだ

や器官は、おのおのの種類によって、異なった指数をもっているから、生物ごとに形がちがってくるし、年令によっても異なった形をもつようになるわけである。

ウマは長い顔と長い脚をもっているが、これはおのおのに特有な成長指数があつて、その支配のもとに成長してゆくからである。ウマの場合は、子どもから親になるまでの成長指数と、原始ウマが現代ウマに進化した場合の進化指数とが、ほぼ一致している珍らしい例である。つまり、ウマはウマに与えられた指数のおかげで、親になるにつれて顔が長くなり、脚が長くなっていくのである。同じように、ふるい昔から現代になるにつれて、顔が長く脚が長くなってきたのである。ウマの場合、たまたま、このような指数をもつことが、有利であつたために、ウマは一途にこの方向に向かって進化してきたのである。

ヒトが誇っている脳の大きさも、多分にその趣きがある。ただ問題なのは、ウマの顔や脚の成長を支配する指数や、ヒトの脳を成長さす指数が、いつの日まで、

環境や自らのために好都合にはたらくかということである。

○

なぜ私がこのような話をもちだしたかというところ、もちろん人は牛物と同じではないにしても、人もまた生物である。してみれば、人もまた、自然の微妙で精緻な支配をうけるかたわら、不器用なはたらきからまぬがれることができないのではないか。そのような不器用なはたらきが、人の中に頭をもたげているのが、ひょっとしたらおのおのの人が持っている「持ち前」なるものに通じているのではないか。そうだとすると、自然に反逆するのでなくて、自然とともに生きようとするのであれば、「持ち前」をみとめて、それを大切に育てるのがわれわれの務めのように思える。

(お茶の水女子大学長)